

トランプとバイデンの大統領選挙勝利演説 および就任式演説の比較

— 「もしトラ」から「ほぼトラ」、そして「確トラ」で、
再び注目されるはずだった両者の舌戦の談話分析 —

小林 敏彦

ABSTRACT

今年の米国大統領選で再度対立候補となると見られている共和党のドナルド・トランプ前大統領と民主党のバイデン現大統領の2016年11月と2020年11月にテレビ中継された米大統領選における両氏の一般投票後の勝利宣言と2017年1月と2021年1月の就任演説の4つのスピーチのスク립トを分析し、内容と言語的な表現、語彙選択、談話形式の特徴を比較し、その相違を生じさせた要因として憶測できる要因を特定する。まず、4つのスピーチ原稿の談話分析を行い、何が語られ何が語られなかったのか、その背景に何があるのか、語用論的アプローチを交えながら、形態素、統語、談話の三つのレベルにおける語彙統語選択のデータ分析の量的、質的結果を報告する。さらに、勝利宣言演説と就任演説の相違点にも触れ、スピーチの目的と聴衆の違い、スピーチ原稿を練る時間的相違、即興的要素の含有の有無、コロナ前とコロナ期間の相違という社会的背景、共和党と民主党との政治的スタンスの違いや個人の宗教的思想背景など要因と憶測される諸要素が特定できた。教育への示唆として、このようなスピーチ原稿執筆の背景がどのような言語的特徴を帯びた談話として完成されるのかを観察し、英語学習者に提示することで、スピーチやプレゼンテーションの原稿やショートエッセイなどの英作文指導において、教育的恩恵が期待できるものと考えられる。英作文の際に含むべき情報や言及すべき事象、学習者自身の思想背景などをどのように他人に伝えるメッセージとして完成させるかなどを実際の資料を提示しながら教授することは意義深いものと考えられる。また、大学のゼミや大学院の英語授業および言語関連の講義において、同様の分析手法を用いた談話分析をさまざまな政治ディスコースを素材に分析・研究する企画を提供し、研究論文のトピックとして選択する可能性についても議論する。最初のスピーチから既に数年が経っているが、2024年の次期大統領選でトランプとハリスが争うことが確定している今、同選挙での勝利宣言と就任演説で何がどのように語られるかを事前に予想し、論じ合うことも興味深いトピックとしてメディア英語研究やメディアを活用した英語授業の良き素材となることを期待したい。

1. INTRODUCTION

2024年11月5日火曜日に予定されている第60回米国大統領選でハリス副大統領とトランプ前大統領との一騎打ちが再度見られることが確定した。さまざまな疑惑と法廷闘争で逆境にあるトランプ氏の人気は高まる一方であるのに対して、ウクライナ支援への後退や移民政策を含む諸政策への対応でバイデン大統領の不人気を取り立たされる中、「もしトラ」、すなわち「もしトランプが（再び）大統領になったら（どうなる？）」という言葉が日本のマスコミやユーチューバーの間で使われ始めてから、すでに「ほぼトラ」、すなわち、「ほぼトランプ当選（が確定）」というフレーズが聞かれている。さらに、「確トラ」も囁かれ、トランプの当確を確信している人たちも増えているように思われる。これを受けて、各国政府もトランプ氏の再登板を想定した動きが画策されている。ウクライナ戦争や台湾有事など、現在グローバルな 이슈に予想不可能なパラダイムシフトが起きるのではないかと懸念が高まっているように思われる。

米国大統領の演説ほど様々な個人や機関で分析されてきた政治ディスコースは他にないものと思われる。かつての力を失ったとは言え、米国大統領の政治的、軍事的、経済的影響力を非常に大きく、その動向は常に一般市民に限らず、さまざまな機関で働くプロフェッショナルたちの注目の的である。大統領の言動は公式・非公式を問わず、常に分析の対象とされ、マスコミは反応する。マスコミが取り上げるのは、ほとんどがその談話の内容であり、その示唆する事態を想定して、民衆に伝えられている。また、日本のジャーナリストもコメンテーターも和訳を見て、意見を言っている人が少なくない。

一方で、大統領の言動は学術的研究の対象ともなり得る。言語学や文学の世界では多様な手法で談話分析がなされ、一般に「政治ディスコース」に分類され、その多くが「批判的談話分析=Critical Discourse Analysis」の手法によりなされ、日本では日本メディア英語学会所属の研究者が中心に研究されてきた。トランプとバイデンの演説のテキストに多くの識者がその特徴を記述しているが、トランプ前大統領の演説には従来の常識を破るさまざまな特徴を含んでおり、やりがいの研究対象である。

1-1. Characteristics of the U.S. Presidents' Inaugural Speeches

本研究では、米大統領の選挙勝利演説 (victory speeches) と就任演説 (inaugural speeches) のテキストを分析し、言語的特徴とその背後にある要因の特定を試みる。米大統領選の勝利演説では、日本の選挙で当確が出たときに、ダルマの目に墨を入れたり、酒樽を割って祝う儀式は見られないが、当確者はマスコミを交えた自陣営で設定した会場での大集会で、支持者への当選報告と選挙運動の協力者への謝辞と自分の公約や政策方針について述べる。観衆の歓喜と拍手の中行われる儀式である。

それに対して、就任演説は、米国議事堂の正面のバルコニーで牧師の前で聖書の上には左手を置いて宣誓した後に行う世界に生放送される注目の演説である。近江 (2020) は米大統領就任演説の目的は政策の詳細を伝える情報伝達ではなく、士気を高めるための通過儀礼であり、「社会の価値観を再認識し、集団の統合を図り、心理的な緊張を解消すること, p.7」を目的にするという。その目的の達成のために、「垣根の修復」「過去との未来へ向けての結束感を固める」「国民を再生への担い手と見立てる」「自ら目指す大統領のイメージを植え付ける」という4要素を演説中に含ませるといふ。

1-2. Trump's Speeches

Golshan (2016) はトランプの話し方が他の一般の政治家とはたいへん異なる特徴を有していると指摘している。その特異性は事前に用意されている文言はほんの一部であり、大半が即興でしかも、バラバラで完結しない英文 (fractured, unfinished sentences) を多用する会話調で話していると指摘している。さらに、ジェスチャーや顔の表情など研究し尽された演説を行っているという。また、あえてそうしているかは不明であるが、不完全な統語構造の言葉を発して、聞き手が何か言葉を返して補完して、メッセージを完成させるスタイルを得意としている。これは、不特定多数を相手に話す時にも、一対一の個人的会話のようにインターアクションが常に介在する工夫がなされた演説であり、説得力ある話術に長けている。そして、トランプは総じてセールスマ

ンの話し方を体得していると感じられる。財界人としてだけでなく、テレビのトークショーの司会やプロレス中継などで話術が磨かれてきたものと思われる。一方で、バイデンにはそのような大衆の中での話術の熟達の機会が少なかったように思われる。この口語的な話し方の特徴は本研究で後ほど記述するが、トランプの2016年11月の大統領選挙勝利演説で明らかになっている。一方で、バイデンは総じて用意された原稿に基づいた演説を行う傾向にある。このトランプが発する不完全な英文は実は第二言語話者にはたいへん理解が困難な話し方であるが、母語話者は省略部を寸時に補い理解することができる。ニュースの英語は語彙力が十分あれば、しっかりと前もって書かれた原稿を読み上げているので理解しやすいが、即興の崩れた英語は文法関係が不明になったり、意味が繋がらず難解であることが多い。

語彙の使用に関しては、Rong (2021) はトランプの演説では説得性を高めるために抽象名詞の使用と複数二人称代名詞 (we) の使用が多く、統語レベルにおいては、情報の効果的な伝達と支持の獲得のための単文 (simple sentences) と平叙文 (declarative sentences) の使用が多くことを指摘している。Zhou (2024) は、演説分析の結果、トランプの言葉は政敵に対する敵対心むき出し (divisive and antagonistic) であり、強調のための反復 (repetition) が多いことが判明させている。

1-3. Biden's Speeches

近江 (2010) は、説得系の演説では、知に訴える「ロゴス」、情に訴える「パトス」、自分自身のオーラに訴える「エトス」のアリストテレスのレトリック理論の3要素を演説の中で働かせるとし、バイデンの2021年の就任演説の内容に関して、Kurkhamidah他 (2021) は、エトス、パトス、ロゴスの要素が、それぞれ55パーセント、37パーセント、8パーセントを占めていると分析している。Tiyas (2023) の研究ではバイデンの演説ではアメリカ人の行動の誇りを称える言い回しが多用されていると指摘している。これはパトスに訴えた手法であると考えられる。

友繁 (2022) は、バイデンの就任演説で利用されている聴衆を説得するための批判的メタファーに関する分析を行い、「スキーマとしてのスタート地点からゴール地点をベースとして過去から未来への時系列を示すと同時に、ゴールへの過程の様々なメタファーを連続体として運用している, p.61」と結論づけている。バイデンの2021年の就任演説の内容に関しては、岩田 (2021) が以下のように酷評している。

演説の内容はバイデン氏が当選した2020年11月から繰り返されてきた「民主党も共和党もない」という抽象的な団結や包摂というメッセージの豪華版に過ぎず、7400万の「私を支持しなかった有権者たち」の心に響くことも届くこともない。

この酷評の背後は不明であるが、大統領の演説として歴代のものの形式を引き継ぎ、教科書通りの構成の演説を行ったと言えるかも知れない。

1-4. Trump's & Biden's Speeches

進藤 (2021) は、トランプとバイデンの就任演説のテキストを共通する言語的特徴とそれぞれの特異性に焦点を当てて分析した結果、人称代名詞の使用に関して、両者ともWeを多用し、バイデンが次にIを多用して、「聴衆との個人的関係性を重視した発言を選んでいる, p.78」のに対して、トランプの発話ではそれが見られなかったという意外な事実が判明した。

両氏の大統領選挙日の演説のテキストの統語レベルの比較分析として、Anggoro (2022) はトランプの演説に占める単文 (simple sentence) の比率が59.2パーセント、複文 (complex sentence) の比率が19.7パーセント、重文 (compound sentence) の比率が15.4パーセント、重複文 (compound complex sentence) の比率が5.6パーセントを占めるのに対して。バイデンの演説にはそれぞれ、40パーセント、26.7パーセント、16.7パーセント、16.7パーセントを占めていると報告している。すなわち、トランプのほうが総じてより単純な構造の英文を発し

ていることを意味する。この構造の差異が聞き手の理解力や共感にどのくらいの影響を与えているのか実証することはできないが、今後の研究に期待した。

トランプとバイデンの演説の分析はさまざまな研究者によって行われてきたが、本研究のように大統領選挙勝利演説と就任演説の4つの演説を統合して研究の対象としたものは見当たらない。

2. METHOD

2-1. Subjects

ドナルド・トランプ前大統領とバイデン現大統領の演説を比較するのは本研究の主旨であるが、演説者の属性が談話に与える言語的特徴を特定する必要性から、両氏の基本的バイオデータを図表1に簡潔にまとめた。バイデンとトランプの人物像に関して、村田（2021）は以下のように評している。

図表1 トランプとバイデンの基本データ

		
Donald Trump 第45代米大統領 (副大統領: Mike Pence)	氏名	Joe Biden 第46代米大統領 (副大統領: Kamala Harris)
June 14, 1946 77 years old	生年月日 年齢	November 20, 1942 79 years old
New York City	出身地	Scranton, Pennsylvania
Republican Party (保守: 小さい政府、自由競争)	政党	Democratic Party (革新: 大きい政府、福利厚生重視)
The University of Pennsylvania (Wharton School) (economics)	最終学歴	The University of Delaware (political science) Syracuse University law school
married	結婚歴	married
Presbyterians? プロテスタント長老派	宗教	Catholic
White Evangelical Protestants (福音派)	支持層	Black & Asians, etc.

バイデンは長い政治経験を持ち、非アイビーリーグ、非WASPであり、対立や怒りではなく妥協と中庸の人である。高齢という共通点を別にすれば、個人的資質では、トランプと好対照である。(p.34)

WASP (White Anglo-Saxon Protestant), すなわち、アングロサクソン系のプロテスタントには分類されない、現職のバイデン大統領は敬虔なカトリック信者 (devout Catholic) である。米国は中世、エリザベス1世や日本では織田信長や豊臣秀吉、徳川家康が活躍した16世紀からヨーロッパから新天地を求めて大西洋を横断して上陸したキリスト教の新教徒が中心に成立した国家とされるが、アメリカ人の成人の5人に1人がカトリック信者であるにも関わらず、また大統領の立候補条件に信条 (faith) に関する制限等があるわけでないが、歴代大統領の中でカトリック信者はJFKとバイデンのみである (Sandstorm, 2021)。しかも、両者とも民主党員である。

長年実業家として、ショービジネスでも成功を取ってきたトランプに対して、バイデンは生粋の政治家として長年ワシントンで活躍し、オバマ大統領の時代には副大統領として米政治の中核に身を置いていた。共に米国出身の白人であり、年齢 (高齢) も背格好も似ており、最終学歴も共に学士を有し、既婚者である。大きな違いは、所属政党 (政治信条)、信仰、支持基盤の3点に集約される。スキャンダルや訴訟の有無などの今回の言語的分析には周辺の属性と思われるので、触れない。

2-2. Materials

2-2-1. Victory & Inaugural Speeches

本研究で分析対象としたテキストは、共和党のドナルド・トランプ前大統領と民主党のバイデン大統領の2016年と2020年に行われた米大統領選における両氏の一般投票後のテレビ中継された勝利宣言演説 (Appendix I 参照) と就任演説 (Appendix II 参照) の4つのネット上に公開されているスクリプト4点

である。信頼性の確認のためネット上で見られる4つの演説動画を観察し、スクリプトとの整合性を精査したが修正等の必要性はなかった。

図表2から一目瞭然であるように、トランプの演説はバイデンのより短く、さらに使用した単語数も少ない。勝利演説では驚くほど似た所要時間であるが、就任演説の長さの違いが際立っている。すわち、バイデンのほうが単語数の密度の高いのに対して、動画を見てもトランプはポーズが多く、ゆったりと話している印象がある。

2-2-2. Speech Writers

現役の大統領のみならず、多くの政治家には演説を作文する、いわゆる、スピーチライターが存在する。映画作品やテレビドラマのシーンで大統領が官邸でスピーチライターに対して原稿の執筆を比較的短時間に用意するように指示する場面が見られる。時に、複数のパターンのスピーチを用意させ、異なる結果に即対応できる体制を構築することも少なくない。できた原稿は大統領や候補本人が語句を追加したり、削除したり、内容の提示順を変えるなど、統語レ

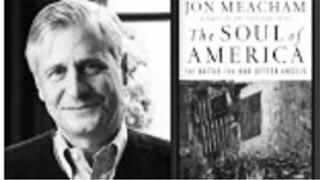
図表2 トランプとバイデンの演説データ

トランプ勝利演説 2016年11月9日	バイデン勝利演説 2020年11月7日	トランプ就任演説 2017年1月20日	バイデン勝利演説 2021年1月20日
			
14分51秒	15分8秒	16分12秒	21分18秒
900 words	1,576 words	780 words	2,371 words
60 words/minute	105 words/minute	49 words/minute	113 words/minute
			

ベルのみならず、談話レベルでの変更も行われ、さらに発話の練習もしていると思われる。発音やデリバリー、ジェスチャーや顔の表情など、スタッフの前でリハーサルを繰り返し、相当の準備をして本番を迎える。演説の場面が重要であればあるほど、その準備に時間をかけ、本番に備えるプラントスピーチ (planned speech準備された演説) が生まれる。

バイデン現大統領とトランプ前大統領にも図表3にあるように、スピーチライターが存在が知られている。これらはネット上の報道などで入手可能な情報である。図表3で一目瞭然なのは、トランプ氏の1996年の選挙勝利演説のスピーチライターが不明であることだ。他の3つの演説はネット探索で容易に見つけ出すことができるが、この勝利演説については見つからない。スピーチの動画を見てもとても用意された原稿を反復している様子を感じられず、支援者の前で関係者の紹介など雑談のような雰囲気の内々インプロンプト・スピーチ

図表3 トランプとバイデンのスピーチライター

Trump's First Victory Speech in 1996	Biden's First Victory Speech in 2020
	 <p style="text-align: center;">Jon Meacham (presidential historian and biographer)</p>
Trump's Inaugural Speech in 1997	Biden's Inaugural Speech in 2020
 <p style="display: flex; justify-content: space-around;"> Steve Bannon (chief strategist) Stephen Miller (senior adviser) </p>	 <p style="text-align: center;">Vinay Reddy (senior adviser and director of speechwriting)</p>

(impromptu speech即興の演説)であったと思われる。ヒラリー・クリントン国務長官が対立候補であったが、まさか、当選するとは本人自身が予想しておらず、演説の用意をしていなかったと思われるほど、動画の様子などを見ても極めて即興性の特性が色濃く出た発話が観察された。

2-3. Analyses

まず、入手した4つの演説原稿のスプリットを用いて、テキストで観察可能な言語的特徴に着目し、形態素(語彙)レベル、統語(文法)レベル、談話レベルの特徴を分析する。形態素レベルでは、出現頻度の高い項目の特定やそれらの特性をテキストマイニングの手法で分析し、統語レベルでは使用頻度の高い構文を特定し、談話レベルでは特定の言語的特性と特定事象への言及の有無を調べる。何が語られ何が語られなかったか両者の演説を比較し、なぜバイデンが触れているのに、トランプは触れていない話題があるのかどうか、そしてそ

図表4 演説を特徴づける三要因

Possible Factors Characterizing Speeches	
Physical	<ul style="list-style-type: none"> • Venue • Target Audience: local vs national / domestic vs international • Speech length • Health • Season / Time / Timing
Social	<ul style="list-style-type: none"> • Disasters: COVID / wildfires / hurricanes, etc. • Polarized Society: Republicans vs Democrats • Racial Injustice: systemic racism / police brutality • Diplomacy: • Security: social unrest / terrorism
Personal	<ul style="list-style-type: none"> • Biological Features: Age / Gender / Nationality / Ethnicity, etc. • Personality & Faith • Political stance : Democratic or Republican • Marital status & family • IQ or Educational Background & Other Experiences

の言及をした理由やその背景にあるものを探る。人間が発する言語行動に影響を与える要因として、時間や場所などの「物理的要因=Physical Factors」、時代背景、災害、事件、紛争、戦争、犯罪の発生などの「社会的要因=Social Factors」、政治スタンス、信条、信仰、性格、人格、人柄などの「個人的要因=Personal Factors」の3つの主因が影響を与えるものと仮定して、両氏の演説の特定事象への言及の有無の背後にあるものを探る。

3. RESULTS & DISCUSSION

3-1. Morpheme Level

語彙項目の出現頻度に基づいて、4つの演説それぞれにおける頻度比較を視覚化したのが図表6である。使用頻度高い語彙項目ほど大きく表示されている。図表7と8はトランプとバイデンの一方の演説だけで使われていた語彙項目、使用頻度が高かった語彙項目、さらに両者で共通に使われた語彙項目をまとめたものである。形態素のレベルでは、品詞別に名詞、形容詞、動詞、副詞に分けて以下分析結果を報告し論じる。

(1) 名詞

大統領の演説は長い歴史の中で、一定の特徴を帯びた名詞が高頻度で使用されてきた。もっとも頻度の高い名詞として、America/American/dreamなどを歴代の大統領が好んで使用してきた。バイデンとトランプの両氏も勝利演説で多用している。

トランプ2016年11月の勝利演説

--- I will be president for all Americans, and this is so important to me.
 --- It's a movement comprised of Americans from all races, religions, ---.

バイデン2020年11月の勝利演説

--- It is the honor of my lifetime that so many millions of Americans

have voted for this vision.

--- We are Americans.

--- Americans have called on us to marshal the forces of decency and the forces of fairness.

興味深いことに、以下にあるようにトランプはAmerican dreamを一度使用しているが、バイデンは使用していない。

--- Working together, we will begin the urgent task of rebuilding our nation and renewing the American dream.

次に、人種と性的少数派に関する名詞について述べたい。人種差別問題は米国建国以来の主要関心事であるが、バイデン登場の時期には米各地では新型コロナウイルスの蔓延、山火事、白人警官の黒人への暴力police brutalityが毎日ニュースのヘッドラインを飾っていた。バイデンの2021年1月の就任演説では、以下の例にあるように、人種やマイノリティを表すAfrican American/white/Asian/Latino/Native America/gay/straight/transgenderが使用されているが、トランプはまったく人種への言及がない点は特記すべきである。

--- the African American community stood up again for me.

--- first woman of South Asian descent

--- Young and old. Urban, suburban and rural. Gay, straight, transgender. White. Latino. Asian. Native American.

人種への言及について、白人警官の暴力事件が多発した時代背景だけでなく、バイデンの所属する民主党の支持基盤である非白人層や性的マイノリティを意識した言及であることも容易に想像がつく。特に、性的マイノリティへの支持表明をバイデン大統領自身が明確に表明しており、2022年6月15日には

LGBTQ当事者たちを守るための大統領令に署名した。さらに、バイデンの妻のジル・バイデンも性的少数者の熱心な支持者であり、日本での性的マイノリティの保護に関するLGBT理解増進法（2023年6月16日成立、同月23日施行）の立法にも大統領夫人が外交を通じて影響を与えたと言われている。

さらに、バイデンの時代はコロナのパンデミックが猛威を振っていた時期であり、以下の例にあるように、pandemicとvirusを使用しているが、トランプの就任の2017年にはまだ未知のウイルスであったため、使用されていない。

- To all those who volunteered, worked the polls in the middle of this pandemic,
- I will spare no effort -- or commitment -- to turn this pandemic around.
- The battle to control the virus.
- until we get this virus under control.
- And I hope it can provide some comfort and solace to the more than 230,000 families who have lost a loved one to this terrible virus this year.

最後に、両者の違いが際立ったのは、信仰に関する語彙の有無である。敬虔なカトリック信者であるバイデンがキリスト教に関連したBible/God/angel/hymnを使用しているが、トランプは形式的な挨拶のフレーズで使用しただけである。

- The Bible tells us that ---.
- Our nation is shaped by the constant battle between our better angels and our darkest impulses.
- as far as their dreams and God-given ability will take them,
- Hopefully, this hymn gives you solace as well.
- God bless you. And may God protect our troops.

(2) 形容詞

特記すべき点として、以下の例にあるように。トランプ2016年の勝利演説で形容詞greatの使用頻度が際立っている。

- great country
- great movement
- great veterans
- greater honors
- great economic plan
- great relationship
- great, great relationship
- great people
- great parents
- great friend
- they are great great guys
- great, unbelievable parents

一方で、バイデンが2020年11月の勝利宣言でgreatを使用したのは以下の一例だけである。

- the forces of hope in the great battles of our time.

さらに、トランプは2016年11月の勝利演説で熱狂的な支持者の前で興奮気味にunbelievableとamazingの二つの形容詞を使用しているが、バイデンの2020年11月のバイデンの勝利演説では使われていない。

- Great brothers, sisters; great, unbelievable parents.
- It was an amazing evening. It's been an amazing two-year period.

(3) 動詞

動詞に関しては、両者の相違点として指摘に値するのは、トランプは使用せず、バイデンだけが使用したcooperateである。他の動詞に関しては、相違点として指摘するのに値するものではなかった。

--- The refusal of Democrats and Republicans to cooperate with one another is not due to some mysterious force beyond our control.

--- And if we can decide not to cooperate, then we can decide to cooperate.

--- They want us to cooperate.

(4) 副詞

副詞の使用に関して、両者とも together の使用が複数回観察された。

トランプ2016年11月の勝利演説

--- I am proud of the coalition we put together,

--- we haven't been able to do when we've done it together.

--- And now, together -- on eagle's wings --

バイデン2020年11月の勝利演説

--- Now it's time for America to bind the wounds of division, have to get together.

--- I say it is time for us to come together as one united people.

--- and your help so that we can work together and unify our great country.

--- Working together, we will begin the urgent task

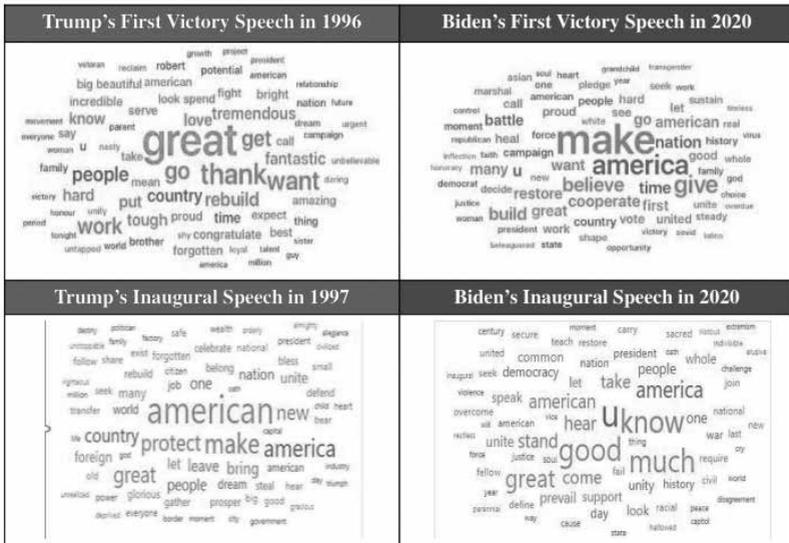
また、両者の相違点として際立っていたのは、以下の例にあるように、トランプが2016年の勝利演説で very を多用していたのに対して、バイデンは2020年11月の勝利演説でまったく使っていなかった点である。

- on a very, very hard-fought campaign.
- I mean, she fought very hard.
- Hillary has worked very long and very hard over a long period of time,
- what they are calling tonight, very, very historic victory.
- They're very shy, actually.
- I was very lucky.
- Thank you very much.

(5) Lexical Difficulty

両氏がそれぞれの勝利演説と就任演説で使用した語彙項目の難易度、すなわちカジュアルな日常生活の会話ではあまり使われない語彙項目に着目し、大学に入学直後の学生が高校時代に学習していなかったであろう想定されるものを特定して図表11にまとめた。

図表5 トランプ・バイデンの勝利宣言演説の使用頻度語彙比較



図表 6 勝利宣言演説の特定使用語彙比較

Trump only	Trump often	common	Biden often	Biden only
first united give asian new real steady white whole believe battle build cooperate restore able african alike beleaguered black blue broad clear constant convincing dark deceased diverse fair fellow free	america american make many hard proud good moment democrat	great time u nation campaign american call look say take president victory woman begin pledge seek tell unite opportunity republican	people want go country work get rebuild family know put dream world fight mean serve million	thank brother potential robert thing love parent congratulate expect spend future growth guy honour men movement period project relationship sister talent veteran bind choose comprise deal don double

図表 7 就任演説の特定使用語彙

Trump only	Trump often	common	Biden often	Biden only
Trump Ina...にだけ出現	Trump Ina...によく出る	両方によく出る	Biden Ina...によく出る	Biden Ina...にだけ出現
protect leave foreign bear become belong bless control defend exist follow gather get live prosper remember share steal transfer win citizen everyone wealth big forgotten glorious old small border capital	make country bring world dream job heart power child	american america great one people new let unite nation american president fight seek thank national many moment safe challenge state way year	good u come hear stand take look speak day unity carry define fail go join put restore fellow united justice soul	much know common whole prevail support democracy history war civil last racial sacred happen lose move overcome require say secure teach cause century thing cry force peace vice violence will

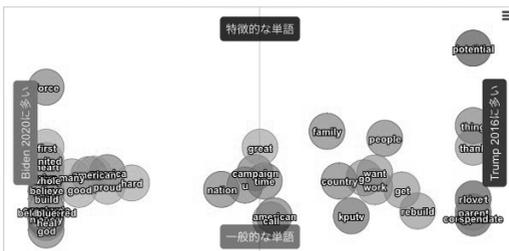
図表8 品詞別使用頻度比較

■ 名詞		
Biden 2020	単語	Trump 2016
20	people	80
85	america	15
48	time	52
31	country	69
53	u	47
58	nation	42
100	battle	0
0	brother	100
0	potential	100
0	robert	100
0	thing	100
51	campaign	49
34	family	66
0	parent	100
46	american	54

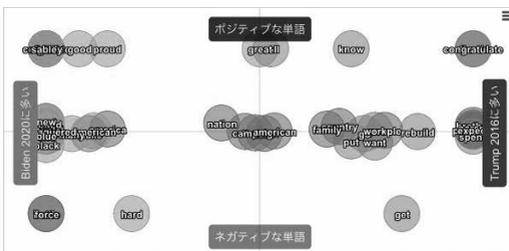
■ 動詞		
Biden 2020	単語	Trump 2016
0	thank	100
23	want	77
89	make	11
100	give	0
25	go	75
23	work	77
100	believe	0
16	get	84
100	build	0
0	love	100
100	cooperate	0
100	restore	0
13	rebuild	87
28	know	72
28	put	72

■ 形容詞		
Biden 2020	単語	Trump 2016
100	first	0
50	great	50
100	united	0
88	american	12
94	many	6
100	asian	0
100	new	0
100	real	0
100	steady	0
100	white	0
100	whole	0
80	hard	20
85	proud	15
92	good	8
100	able	0

図表9 特徴的な単語二次元マッピング比較



図表10 ポジティブ・ネガティブ単語二次元マッピング比較



図表11 高難易度語彙項目比較

Trump's First Victory Speech in 1996	Biden's First Victory Speech in 2020
<ul style="list-style-type: none"> [] leverage 	<ul style="list-style-type: none"> [] overdue [] mandate (x2) [] marshal the forces of decency [] action blueprint [] on a bedrock of science [] God-given ability [] solace [] hymn [] on the breath of dawn
Trump's Inaugural Speech in 1997	Biden's Inaugural Speech in 2020
<ul style="list-style-type: none"> [] criminal conviction [] rusted-out factories [] carnage [] ravages [] reinforce old alliances [] eradicate [] allegiance [] patriotism [] stir our souls [] wideswept plains 	<ul style="list-style-type: none"> [] on this hallowed ground [] salute [] deferred [] elusive [] the Emancipation Proclamation [] resentment [] nativism [] perennial [] setbacks [] manipulated [] riotous mob [] within the guardrails [] cometh [] alliances [] systemic racism [] cascading crises [] unfolding story [] forebearers [] trepidation

演説はその聞き手を意識して使用語彙を選択することは当然であり、これは英字新聞や雑誌にも同様に読者層に合わせた語彙選択をする。高級紙は大衆紙よりも知識人に馴染み深い語彙項目を選ぶ。

共和党支持者と比較して、民主党は知識人の支持者が多いと一般に言われていることもあり、バイデンも格調の高い語彙を使用しているのに対して、トランプ支持者はずばり庶民であり、わかりやすい日常生活での使用頻度の高い語彙を意識的または無意識に使っていると憶測される。または、トランプ自身がふだんからそのような語彙を使う習慣にあると言えるかも知れない。

3-2. Syntactic Level

(1) want to vs would like to

統語レベルについては、まず以下の例にあるように2016年の勝利演説におけるトランプのI want toの多用が際立つ。

--- That is ow what I want to do for our country.

--- I also want to thank my sisters.

--- I want to thank my family ---.

--- And I want to tell you ---.

--- I want or a very special thanks to ---.

2020年の勝利スピーチでは、バイデンはI want toの使用はなく、代わりにより丁寧な形であるI would like toが一度だけであるが使用された。

--- And I'd like to take this moment to think ---.

(2) I think/I believe/I hope/hopefully

2020年のバイデンの勝利では、以下の例にあるように、自分の発言に一定の条件や効果を与える枠構造であるI think/I believe/I hope/hopefully (=I

hope) が使用されているが、2016年のトランプの勝利演説ではまったく使われていない。すなわち、トランプは断言的に物事を言うのに対して、バイデンは枠構造を多用し、断定を避け、やや控えめに発話している印象を受ける。

--- I think we did that.

--- I believe that this is part of the mandate from the American people.

--- I believe at our best America is a beacon for the globe.

--- I hope it can provide some comfort ---.

--- Hopefully, this hymn gives you solace as well.

(3) not A but B

政治ディスコースでは、特定の事象を際立たせる強調構文の一種と言える not A but Bの構造が多用される。特に選挙演説などの他者と自分の違いや、変革を強調する際にこの構造は欠かせない。以下の例にあるように、トランプとバイデンの演説でも確認できた。

トランプ2016年11月の勝利演説

--- As I've said from the beginning, ours was not a campaign, but rather an incredible and great movement made up of

バイデン2020年11月の勝利演説

--- I pledge to be a president who seeks not to divide, but to unify.

--- Who doesn't see red and blue states, but a United States.

--- We lead not by the example of our power, but by the power of our example.

(4) Topicalization

統語レベルの分析では特定の情報を文頭に持ってきて強調や対比を示す話題

化が非常に高い頻度で観察された。特に、トランプの1997年1月の就任演説における多用が際立つ。2か月前の1996年11月の即興的要素を多分に含む勝利演説では一例しか使用されていなかったことから、彼のスピーチライターの影響が色濃く出ていると言える。

トランプの話題化で文頭に置かれる語句が副詞句であるに対して、図表12にあるように、バイデンは目的を表す不定詞句To overcome, challenges, to restore--が複数並べられている。この話題化と反復の結合体はトランプの演説では確認されないのは特記すべきであろう。トランプの使う統語構造はより単純であり、会話的であると言われるゆえんが伺える。

図表12 話題化

Trump's First Victory Speech in 1996: 0	Biden's First Victory Speech in 2020: 1
<input type="checkbox"/> To all Republicans and Democrats ---, I say -	<input type="checkbox"/> With full hearts and steady hands, let us ---
Trump's Inaugural Speech in 1997: 7	Biden's Inaugural Speech in 2020: 3
<input type="checkbox"/> Together, we will determine the course --- <input type="checkbox"/> For too long, a small group in our nation's -- <input type="checkbox"/> But for too many of our citizen, a different -- <input type="checkbox"/> For many decades, we've enriched foreign -- <input type="checkbox"/> One by one, the factories shuttered and left - <input type="checkbox"/> From this day forward, a new vision will --- <input type="checkbox"/> From this moment on, it's going to be ---	<input type="checkbox"/> To overcome these challenges, to restore --- <input type="checkbox"/> To all of those who supported our campaign, <input type="checkbox"/> So, with purpose and result, we turn to ---

(5) Repetition

反復は演説の最高頻度の統語的特徴のひとつである。相手の聞き漏らしのないように、重要な部分は何度も繰り返し、記憶に深く長くとどまるように試みる。これはフォーマルな発話に限らず、日常会話でも頻発する事象である。

日常会話における反復は同一の語彙の繰り返しであることがほとんどであるが、フォーマルな演説の場合、図表13の例にあるように、中身を変えた同一の

枠構造の繰り返しが多い。カジュアルで会話調であった2016年11月のトランプの勝利演説では、この同一枠構造反復は見られなかったが、2か月後の2017年1月の就任演説では多用されている。バイデンの演説では、2020年11月の勝利演説の段階でこの構造が著しく多く使われたが、2021年1月の就任演説では反復の頻度が低く抑えられている。

図表13 反復表現

Trump's First Victory Speech in 1996: 4	Biden's First Victory Speech in 2020: 11
<ul style="list-style-type: none"> □ Thank you all. Thank you all. □ Thank you. Thank you very much. □ <u>No</u> dream <u>is too</u> big. <u>No</u> challenge <u>is too</u> great. □ We will deal fairly <u>with everyone</u>, <u>with everyone</u>. 	<ul style="list-style-type: none"> □ I pledge to be a president <u>who seeks not to</u> x 3 □ I sought this office <u>to</u> restore the soul x 4 □ It's time <u>to</u> put away the harsh rhetoric x 3 □ <u>To</u> all those who volunteered --- x 3 □ The Bible tells --- <u>a time to</u> build x 4 □ <u>to</u> marshal the <u>forces of</u> decency and x 4 □ <u>The battle to</u> control the virus x 6 □ <u>Ahead to an</u> America that's - x 5 □ <u>With</u> full hearts and steady hands x 3 □ <u>A nation</u> united. x 3 □ <u>Thank you.</u> X 3
Trump's Inaugural Speech in 1997: 6	Biden's Inaugural Speech in 2020: 4
<ul style="list-style-type: none"> □ <u>We will</u> determine the course of America x 4 □ <u>We will bring back</u> our jobs. x 4 □ <u>We will be protected.</u> x 4 □ <u>We all bleed the same</u> red blood x 3 □ <u>We will make</u> America strong <u>again.</u> x 5 □ <u>God bless</u> you, and <u>God bless</u> America. 	<ul style="list-style-type: none"> □ <u>Much</u> to repair x 5 □ We have never ever ever ever failed □ <u>To all of those who</u> supported x 2 □ I <u>understand</u> that many of my fellow x 3

3-3. Discourse Level

3-3-1. Similar Referential Choices

トランプとバイデン両氏が勝利宣言した直後に発したメッセージで共通した言及事象は、支持者への感謝の念を表すとともに、以下の例にあるように、落選者に対する謝辞を表明することである。

トランプ2016年11月の勝利演説

--- I've just received a call from Secretary Clinton. She congratulated us, it's about us, on our victory, and I congratulated her and her family on a very, very hard-fought campaign. I mean, she fought very hard. Hillary has worked very long and very hard over a long period of time, and we owe her a major debt of gratitude for her service to our country. I mean that very sincerely.

バイデン2020年11月の勝利演説

--- And to those who voted for President Trump, I understand your disappointment tonight. I've lost a couple of elections myself. But now, let's give each other a chance.

また、2020年11月の大統領選で敗北を認めるのを渋ったトランプは例外として、投票結果が判明し、勝敗が確定した時に落選者本人が勝利者に電話して儀礼的な祝福を伝え、過去の発言に関する謝罪を含む祝意を伝えるのが流儀となっている。そして、勝利演説では図表14にあるように、自分へ投票した有権者だけでなく、敵対した側に投票した人たちに対しても、大統領として奉仕することを宣誓する挨拶である。このメッセージは政府の代表であり、かつ国家元首である共和制とは異なり、世襲制の元首（天皇陛下）を有し、政府の代表である首相と与党党首が務める議会君主制の日本では馴染みの薄い場面である。

また、就任演説では両氏とも、実行不可能なことはないと言明し、主権在民を強調し、国民の断絶の解消を訴え、米国の独立独歩の方向性を示している。

また、勝利演説では以下の例にあるように、トランプは親族一同を舞台に上げて、一族の紹介を個人名を交えて、バイデンの倍近い語数で時間をかけて行っていた。一方、バイデンは妻の個人名以外は血族の呼称のみで言及していた。

図表14 トランプ・バイデンが共通して言及した事象

Trump's First Victory Speech in 1996	Biden's First Victory Speech in 2020
<p>(1) I pledge to every citizen of our land that I will be president for all Americans, and this is so important to me. For those who have chosen not to support me in the past, of which there were a few people, I'm reaching out to you for your guidance and your help so that we can work together and unify our great country.</p>	<p>(1) I ran as a proud Democrat. I will now be an American president. I will work as hard for those who didn't vote for me as (for) those who did.</p>
Trump's Inaugural Speech in 1997	Biden's Inaugural Speech in 2020
<p>(1) Do not allow anyone to tell you that it can't be done.</p> <p>(2) What truly matters is not which party controls the government, but whether our government is controlled by the people.</p> <p>(3) We do not seek to impose our way of life on anyone, but rather to let it shine as an example for everyone to follow.</p>	<p>(1) Don't tell me things can't change.</p> <p>(2) We must end this uncivil war that pits red against blue, rural versus urban or rural versus urban, conservative versus liberal.</p> <p>(3) We'll lead not merely by the example of our power, but by the power of our example.</p>

トランプ2016年勝利演説

--- And now I'd like to take this moment to thank some of the people who really helped me with this, what they are calling tonight, very, very historic victory. First, I want to thank my parents, who I know are looking down on me right now. Great people. I've learned so much from them. They were wonderful in every regard. I had truly great parents. I also want to thank my sisters, Mary Anne and Elizabeth, who are here with us tonight. And, where are they? They're here some place. They're very shy, actually. And my brother Robert, my great friend. Where is Robert? Where is Robert? My brother Robert. And they should all be on this stage, but that's OK. They're great. And also my late brother, Fred. Great guy. Fantastic guy. Fantastic family. I was very lucky. Great brothers, sisters; great, unbelievable

parents. “To Melania and Don, and Ivanka, and Eric and Tiffany and Baron, I love you and I thank you, and especially for putting up with all of those hours. This was tough. This was tough. This political stuff is nasty and it's tough. So I want to thank my family very much. Really fantastic. Thank you all. Thank you all.”

バイデン2020年勝利演説

--- As I said many times before, I'm Jill's husband. I would not be here without the love and tireless support of Jill, Hunter, Ashley, all of our grandchildren and their spouses, and all our family. They are my heart. Jill's a mom -- a military mom -- and an educator. She has dedicated her life to education, but teaching isn't just what she does -- it's who she is. For America's educators, this is a great day: You're going to have one of your own in the White House, and Jill is going to make a great first lady.

3-3-2. Different Referential Choices

(1) 副大統領への言及

バイデンが言及しているのに、トランプがまったく触れていない対象が際立った。まず、バイデンが副大統領への言及を行い称えていたが、トランプはペンス副大統領がすぐそばにいるのにまったく無視し続けた。これがのちの議会堂襲撃事件との関連をうかがわせる象徴的な場面であると思われた。個人的な要因で起きた不作為と言える。

(2) 歴代大統領への言及

バイデンはリンカーンなどの過去の偉大な米大統領の偉業を称えたが、トランプは皆無であった。

以下の2017年1月のトランプの就任演説一節にあるように、ワシントン政治

図表15 副大統領への言及

Trump's First Victory Speech in 1996	Biden's First Victory Speech in 2020
 <p>Pence</p> <p>He was never mentioned by Trump.</p> <p>He was never mentioned by his own boss.</p> <p>But he was mentioned by his opponent.</p>	 <p>Harris</p> <p>And I will be honored to be serving with a fantastic vice president.</p> <p>And I will be honored to be serving with a fantastic vice president, Kamala Harris.</p> <p>Kamala, Doug – like it or not – you're family. You've become honorary Bidens and there's no way out.</p>
Trump's Inaugural Speech in 1997	Biden's Inaugural Speech in 2020
<p>Chief Justice Roberts, President Carter, President Clinton, President Bush, President Obama, fellow Americans, and people of the world.</p>	<p>Chief Justice Roberts, Vice President Harris. Speaker Pelosi, Leader Schumer, Leader McConnell, <u>Vice President Pence</u>, and my distinguished guests, my fellow Americans.</p>

図表16 歴代大統領への経緯の表明の有無

Trump's First Victory Speech in 1996	Biden's First Victory Speech in 2020
	<p>[] Lincoln in 1860 - coming to save the Union.</p> <p>[] FDR in 1932 - promising a beleaguered ---</p> <p>[] JFK in 1960 - pledging a New Frontier. ---</p> <p>[] And twelve years ago, when Barack Obama--</p>
Trump's Inaugural Speech in 1997	Biden's Inaugural Speech in 2020
<p>[] Chief Justice Roberts, President Carter, President Clinton, President Bush, President Obama, fellow Americans, and people of the world.</p>	<p>[] – as does President Carter who I spoke ---</p> <p>[] --- in 1863, Abraham Lincoln signed ---</p>

に対抗意識むき出しのトランプにとって過去との清算が重要だったのかも知れない。これも個人的な要因で起きた不作為と言えよう。

トランプ2017年1月の就任演説

- A Washington flourish – but the people did not share in its wealth.
- Politicians prospered – but the jobs left, and the factories closed.
- We will no longer accept politicians who are all talk and no action, constantly complaining but never doing anything about it.
- The time for empty talk is over.

(3) 疫病, 災害, 社会問題への言及

また、トランプの就任時の2017年1月にはまだコロナパンデミックも起きておらず、山火事も目立って多かったこともなく、また警官の黒人への暴力が新聞のヘッドラインを飾るほどニュースになっていなかったが、バイデンの就任時の2021年にはこれら3つすべて大問題となっていた。当然のことながら、以下の2021年1月のバイデンの就任演説の例にあるように、バイデンはこれの自然災害や社会問題への言及がされていたが、トランプの演説にはなかった。この言及に有無は、社会的要因で生じた作為・不作為と言える。

バイデン2021年1月の就任演説

- Folks, this is a time of testing. We face attack on our democracy and on truth, a raging virus, growing inequity, the string of systemic racism, a climate in crisis, America's role in the world.

(4) キリスト教への言及

そして、敬虔なクリスチャンのバイデンはキリスト教の聖書や聖人、教会への言及を2020年11月の勝利演説でも2021年1月の就任演説でも行った。トランプは、2016年11月の勝利演説の多くの時間を親族の紹介に充てたが、こうした

信仰に関する言及は一切なかった。しかし、2017年1月の就任演説ではスピーチライター的主張があったのか、やや違和感を覚えるほどしっかりと入っている。トランプ率いる共和党の支持団体としてプロテスタント系の福音派があるが、トランプ自身の信仰についてはほとんど伝えておらず、教会へ行ったニュースレポートもほとんど見聞しないことから、両氏の勝利演説だけを比較すると、この差は個人の信仰の差が出ているものと思われる。

図表17 信仰を反映した言及の有無

Trump's First Victory Speech in 1996: 0	Biden's First Victory Speech in 2020
	<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> The Bible tells us that to everything there is <input type="checkbox"/> God bless you and may God protect our troops.
Trump's Inaugural Speech in 1997: 4 parts	Biden's Inaugural Speech in 2020: 3 parts
<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> The Bible tells us, "how good and pleasant -- <input type="checkbox"/> -- most importantly, we are protected by God. <input type="checkbox"/> -- by the same almighty Creator <input type="checkbox"/> God bless you and God bless America. 	<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> -- we come together as one nation under God <input type="checkbox"/> St. Augustine, a saint in my church, wrote --- <input type="checkbox"/> I promise you that this as the Bible said --- <input type="checkbox"/> Before God and all of you, I give you --- <input type="checkbox"/> May God bless America and may God protect our troops.

4. CONCLUSIONS

本研究では主に以下5点の相違点が判明した。

(1) 過去の大統領就任式の常套

バイデンは歴代大統領がそうしてきたように、就任演説会場の場にいた副大統領や複数の前・元大統領へ丁寧な挨拶を行い、過去の歴史上の大統領への尊

敬の念を表明したが、トランプはこれらの伝統に従わず、その場にいたペンス副大統領への言及すらなかった。この時点で、後日反旗を翻したペンスとの不仲は始まっていたと憶測される。

(2) 人間性を問うか、不平不満を煽るか

長年政界に身を置くバイデンが主に聴衆に人間性に訴えかけるような内容に対して、財界出身のトランプは政治家への攻撃や国際政治における他国への米国の過剰援助などの不平等感を煽る表現が際立っていた。

(3) 支持基盤を意識した使用語彙レベルとデリバリー

トランプが使用した語彙は、会話での使用頻度の高いものが多用され、身振り手振りが多く、さらに聞き手の理解力を高めるとされる反復 (Repetition) や話題化 (Topicalization) が多かったのに対して、バイデンのスピーチには文語的で通常の会話では使用されることが少ない、堅いまたは格調高い表現が目立った。まさに、口語と文語のスタイルの対比が観察された。口語のトランプ、文語のバイデンという対比が確認された。

(4) 事象言及における社会的要因 (パンデミックの有無)

バイデンの時代は、コロナ (COVID-19 pandemic)、米本土での山火事の多発 (frequent wildfires)、白人警官の暴力 (police brutality) が社会の大きな関心事であり、演説中にもこれらの事象への言及が顕著だったが、時期が前のトランプの演説にはそれらへの言及は皆無であった。トランプの時代には目立った特異な事件等はなかった。

(5) 事象言及における個人的要因 (信条)

熱心なカトリック信者として知られるバイデンは、聖書の一節や宗教家への言及が目立つが、ふだんから宗教性があまり伝えられていないトランプの勝利演説ではなかった。

5. PEDAGOGICAL IMPLICATIONS

練りに練られた米大統領スピーチには、英語学習者のみならず他の政治家も学ぶべき名言や表現が観察されることが少なくない。戦後の米国の歴代の大統領の中でも、35代ジョン・F・ケネディ、40代ロナルド・レーガン、42代のビル・クリントン、44代バラク・オバマの演説は多くの識者から演説のお手本として賛美され、オバマの代には日本の書店ではオバマの名言集や関連の英語教材が目立っていた。

それでは、5番目のお手本となる名演説者は誰か。45代ドナルド・トランプか46代ジョー・バイデンかを選ぶなら、その独自性と一部の熱狂的な支持者を魅了するトランプであろう。結論で述べた通り、トランプの口語、すなわち、カジュアルでそこにいる身近な人に語りかけるように口ぶりやジェスチャー、平易な語彙、口語的な特徴を有した文法構造から成る発話がより説得性の高い、共感を呼ぶ演説の特徴であると結論づけることができる。

5-1. Colloquial English Grammar (CEG)

トランプの演説が平易な語彙を使い話し言葉をベースにしているのに対して、バイデンは英語学習者には難易度が高い語彙で格調高い文語のスタイルで話すこと記述できるが、語彙が平易だからと言って、聞き手の理解度が高まるとは必ずしも言えない。特に英語の第二言語話者によって、話し言葉は実は書き言葉より文法構造が複雑なのである。機能文法の創始者である著名な英国人の言語学者Haliday (1994) は、話し言葉の複雑な性質 (complexity) をダンスに例え、「固定されず密度が高いが、変化に富み複雑である (=not static and dense but mobile and intricate)」と述べている。しっかりと準備され練られた演説はニュース原稿のように文法的構造や論理の展開が適切で聞き手は語彙力十分あれば、しっかりメッセージの内容を理解できる。しかし、Carter&McCarthy (1991) が口語で交わされる発話には「句または不完全な節、主節と結合しない従属節 (=phrase, or of incomplete clauses, or of clauses with subordinate clause

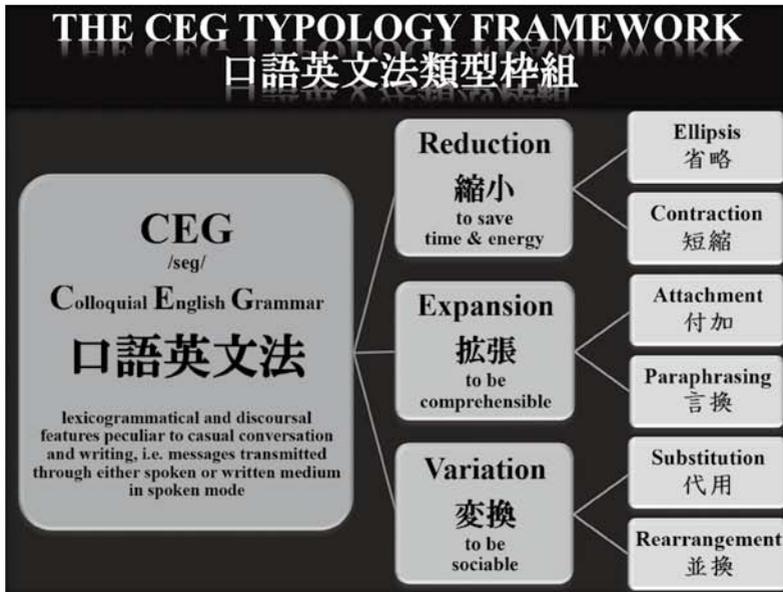
characteristics but which are apparently not attached to any main clause)」が含まれるとし、従来のセンテンス単位の発話を学習の目標にするのではなく、単語、句、節単位の発話を重視すべきであると主張している。英語の聞き取り、または即興で作文され送られてきたメッセージを理解するには、主部、述部、修飾部などのセンテンスの構成要素が教室で習ったものとは異なる形態に慣れておく必要がある。母語話者は不完全なメッセージを省略または欠損した部分を補完することがさほど困難でないかも知れないが、第二言語話者、特に初級者のレベルではしっかりと教科書通りに話したり、書いたりしてくれないと理解できなくなるのである。トランプの英語とバイデンの英語のどちらの英語のほうが日本語を母語とする日本の学生に理解しやすいかを検証したデータは現時点では入手できていないが、おそらく、バイデンの難解語の使用の要素のほうがトランプの口語的発話の要素よりも学習者の理解に負の影響を与えるものと推測できる。

口語、すなわち、日常のカジュアルな口頭の会話や友人通しのメールのメッセージについて、小林はその特徴を50の類型に体系化し、The CEG Typology Frameworkとしてまとめている。

Kobayashi (2014) は口語英文法の類型化は学習者、教員、研究者、そして教科書執筆者に有益であると解説している。特に、この類型は教員には必須の知識であり、指導上もこの知識なしに検定教科書を使った授業を展開するこの危うさを指摘している。小林 (2013) は、中高の文科省検定英語教科書25種に記載されている対話文のテキストを分析した結果、図表18にある50の類型のうち、教科書の記載例は半分以下であり、大半の教科書が書き言葉をそのまま対話文のはめ込んだような生徒としてはたいへんフォーマルな堅い話し方を学習していたことが判明した。そこで、以下の5つの緊急提言を行っている。1) 教科書として教育目的のために事実を曲げてはならない。2) 執筆者全員が口語英文法を理解する。3) 現場の教員からのフィードバックを重視する。4) 執筆者全体の50%を英語母語話者にする。5) 口語英文法の研究や教科書分析を活性化する。

同論文の切り抜きを全出版社と著者に郵送したが返信もなく、電子メールの一斉送信の際にブラインド送信しなかったことに抗議する返信が一件あっただ

図表18 The CEG Typology Framework



The CEG Typology Framework
— A Way to GiveShape to Colloquial English—

Reduction 縮小 ● → ● W → C		Expansion 拡張 ● → ● W → C		Variation 変換 ● → ★ W → C	
Ellipsis 省略	Contraction 短縮	Attachment 付加	Paraphrasing 言換	Substitution 代用	Rearrangement 並換
1. Greeting 挨拶 p.54	14. Abbreviations 略語 p.72	19. Attaching the Personal Pronouns you 人称代名詞 p.88	26. Repetition 反復 p.116	30. C Collocations on 11語高算 p.138	44. Topicalization 話題化 p.179
2. Fixed Expressions 定型表現 p.56	15. Nicknames 愛称 p.74	20. Attention-Getting Signals 注意喚起語句 p.90	27. Redundancy 余剰要素 p.120	31. Frequent Use of <i>of</i> / <i>of</i> の多用 p.142	45. Post Positioning 後置 p.172
3. Ellipsis in Headlines 高算での省略 p.40	16. Texting Abbreviations 略式短語 p.76	21. Reaction Signals 反応語句 p.109	28. Using More Clauses 節の多用 p.124	32. Frequent Use of give/giver Phrases <i>give</i> の動詞句 p.144	46. Left Dislocation 左方転位 p.174
4. Ellipsis of Subject 主語 p.44	17. Verbal Phrase Contraction 動詞句短縮 p.78	22. Discourse Markers 話法標識 p.104	29. Communication Strategies 意思伝達方略 p.128	33. Verbmacular Range of Expression 非公式表現 p.146	47. Right Dislocation 右方転位 p.176
5. Ellipsis of Copula <i>be</i> in a Command 命令文 <i>be</i> の省略 p.46	18. Coalescent Assimilation 一体化 p. 80	23. Tags 付加詞 p.106		34. Vulgarism 俚語 p.148	48. Post-Wh-Word Interrogative 後置疑問詞文 p.178
6. Ellipsis of <i>if</i> 節縮減 p. 48		24. -'ve got to 've got to p.110		35. Progressive Form of a State Verb 知能動詞進行形 p.150	49. Declarative Question 平叙疑問文 p.180
7. Ellipsis of Copula <i>be</i> in the Middle 文 <i>be</i> の省略 p.52		25. Preference for Phrasal Verbs 群動詞化 p.112		36. <i>who for whom</i> <i>whom for who</i> で代用 p.156	50. Parataxis 並列結合 p.182
8. Ellipsis of <i>that</i> 接続詞 <i>that</i> p.54				37. Past Tense for Present/Past Perfect 過去形で現在・過去 現在形 p.152	
9. Ellipsis of Indefinite 不定詞 p.55				38. <i>more be</i> as in Subjective Mood 肯定法 <i>more be</i> p.154	
10. Ellipsis of -y 副詞接尾辞 p.58				39. Neutralizing a Personal Pronoun 人称代名詞中性化 p.158	
11. Ellipsis of 前置詞 p.62				40. <i>less be</i> as a Countable Noun 可算名詞 <i>less be</i> p.160	
12. Ellipsis of <i>have/ had</i> have/ had p.66				41. <i>like for as</i> <i>as</i> の代用 p.162	
13. Ellipsis at the End 文尾での省略 p.68				42. <i>more be</i> as a Short Adjective <i>more + 短</i> 形容詞 p.164	
				43. Double Negation 重否定 p.166	

けであった。日本の英語教育の将来を懸念するが、幸いにもいまの若い学習者はITCの発達により、検定教科書以外の英語のインプット量のはるかに大きく、教育の負の干渉はさほど懸念する必要はないように思われる。

5-2. Useful Structures and Phrases for EFL Learners

トランプの演説が平易な語彙を使い話し言葉をベースにしているのに対して、バイデンは英語学また、本研究で英語学習者がお手本とすべき役立つ表現が多く特定された。図表19は、本研究で特定された英語学習者に筆者の経験上ぜひ使ってもらいたい談話構造、図表20はこのまま覚えて使ってもらいたい役立つフレーズである。

(1) Repetition

小林 (2016) は、反復の機能として、1) 強調 (Emphasis), 2) 時間稼ぎ (Buying Time), 3) 想起 (Trying to Recall), 4) 言い直し (Correction), 5) 口癖 (Habits), を挙げている。中でも、強調は人が反復する動機としてもっとも頻度の高い発話現象と思われる。

説得力あるメッセージの伝達は、流れるメッセージの中で特定の箇所を強調することが基本である。それには、声量を上げたり、身振り手振りを加えたり、非言語の行動を取るだけでなく、言語的にも語順を変えたり、反復したり、一定の手法が存在する。中でも反復は強調する時に使われる常套であり、同じメッセージを繰り返す、語彙的反復と同じ統語構造を繰り返す統語的反復に分類される。反復は余剰要旨として論文などのフォーマルな英文では避けられる傾向にあるが、口語では積極的に用いるように英語学習者には奨励されるべきである。

(2) Topicalization

Topicalization (話題化) は大切な情報や強調したい要素を真っ先に相手に伝えることであり、表記上、英文の先頭に置かれる。小林 (2016) は、話題化の機能として、1) 特定の要素を強調する、2) 対象を示す、3) 情報の流れを

整えて結束構造を維持する、を挙げている。

英語の基本構造として、I went to Otaru to eat sushi yesterday.のように場所や時間を表す副詞(句)は通常は文尾に置かれる。しかし、小樽に寿司を食べに行ったのは一昨日ではなく昨日であることを強調する場合には、Yesterday, I went to Otaru.のように、yesterdayが文頭に置かれる。1965年リリースされたビートルズの名曲Yesterdayの歌詞は、Yesterday, all my troubles seemed so far away.と話題化された英文で始まる。ただ、ここであまり指摘されていない問題は、日本語母語話者(L1 Japanese speaker)が英語を話す時に、強調する必要がない場合にも、場所や時間を表す要素を文頭で発する日本の基本的な語順の干渉(negative L1 transfer; interference)が生じて、初級者(novice)ほど、ほぼ常に、文頭にyesterdayを置いて話すことが多い。ジャーナルなどの筆記でも同じである。例証として、以下は、私が数年ほど指導している英語ニュースのディクテーションLINEグループで4人の日本語母語話者が書き込んだ英文したジャーナル(2024年3月29日)の一部を比較提示したい。英語の運用能力の高い順からA,B,C,Dに並べている。AとBは継続的に英語を学習してきた英検準1~1級のレベルであるのに対して、CとDはビジネススクールで筆者が担当するビジネス英語の履修者であり、いわば英語のやり直し組である。時および場所を表す副詞句の位置に着目すると、AとBは副詞句を文尾に置いている。一方、CとDは文頭にYesterdayを置いており、母語の干渉を受けていると判定できる。

大学3年生A (20代前半女性)

I had lunch with a friend from University the other day. (中略)

It was lunchtime on a weekday, but there were tourists and office workers on their lunch breaks lined up in front of the restaurant. (以下省略)

ビジネスパーソンB (40代前半男性)

I had dinner with one of my client yesterday. He reserved the

restaurant for me. Surprisingly, the restaurant was same restaurant where I visited at the day before yesterday. Moreover, the seat I was invited was same. (以下省略)

ビジネスパーソンC (60代後半男性)

Yesterday I received a billing email from AEON CARD to me. I do not have an AEON card. I immediately thought it was a fraudulent email. The amount charged is an amount that anyone can pay. (以下省略)

ビジネスパーソンD (60代後半男性)

Yesterday, someone from my class visited me at the university alumni office. He has been working for a major company in disaster prevention equipment since graduation, then for a company owned by his parents. (以下省略)

概して、外国語の学習において、習熟度が上がるほど、母語の干渉を受けにくくなり、英語の場合は、いわゆる「英語で考える」ことができるようになる。頭の中で日本語を英語に訳することなく、意味の世界の中を漂い、頭に浮かぶ事象を母語を通さずに英語で言い表す。頭の中になりんごの映像が浮かんだら、「りんご」と一度母語で認識するのではなく、その物体そのものの姿形を捉え、言語化する時に英語という言語を選択しているのである。英語の教員は、学習者の発する英語で瞬時に分析を行いそのレベルを察知できるのである。もっとも確実により正確な分析は、目の前で紙にペンで特定の話題について英作文をしてもらうことである。数行書いたものがあれば、語順や語彙選択、さらに冠詞の使い方やエラーの発生の仕方を見極め、レベルを判断できる。また、母語を特定することも可能である。談話分析は英語を教える職業人には不可欠なスキルである。

(3) Contrast or Emphasis

政治ディスコースにおいて、自己の優位性を強調するために、他者との差別化を図るコンテキストにおいて必然的に対比表現が多用される。A but Bは、その典型であり、トランプとバイデンの演説の中でも確認できる。また、新たな時代への期待をもたせようと、現政権の否定や過去との清算や変革を語る場面ではno longerの使用が頻発する。幸いにも、この二つの表現は日本の高校生も習っているようであるが、英作文やプレゼンでもっと積極的に使用するよう奨励して欲しい。

(4) Asking Questions

政治演説の中で支持者に質問を投げて、Yes-Noを言わせる場面をよく見かける。聞かずとも当然なことであっても聴衆の共感を得る手法としてたいへん有効な方法であろう。英語の授業でも教員は学生によく質問を投げかけるが、英語の母語話者の英語教員の間では日本人英語学習の反応は芳しくないとして不評である。意識的または無意識のうちに日本人は公共の場で目立たないようにしようとする人が少なくない。それが日本の治安の良さに貢献しているという意見もあるが、英語の授業においては、教員にとっては無視された気分になり、不愉快な気分になることがある。そのため、学期の途中からあまり学生に質問をしなくなる外国人英語教員も見受けられる。もちろん、人生経験を積んだ、モチベーションの非常に高いビジネススクールの学生は積極的であるが。

英語学習に限らず、大学生にはもっと質問力を身につける指導をすべきである。何を質問してよいかわからないのはどうにもならないが、少なくとも質問したいのに躊躇う習慣は良くない。質問したら目立ち、何か陰口をたたかれるのではないかという邪推はナンセンスであることを伝えなければならない。海外留学や国際会議等で日本人の発言が少なく、行儀よく聞いてくれるが、質問がないと評されるのはほんとうに残念である。我々はけっして残念な国民と思われたくないはずである。

(5) Quotation

名言や注目度の高い人物の発言や聖書の一節や詩の一節を演説中に引用する人は少なくない。引用することで発話者の信用性を高める働きがあると考えられる。偉人も自分と同じことを言っていると聴衆に示すことで後光効果が期待される。図表17に記載されているように、トランプは勝利演説では皆無であったが、就任演説で聖書からの引用を行い、バイデンは勝利演説と就任演説の両方で聖書からの引用と聖人の言葉を引用している。聖典や宗教者の言葉の引用は、信仰を共有する聞き手や支持者にはより大きな共感を生み賛同を得やすいであろう。

米国は基本的にキリスト教国である。大統領も牧師（新教徒の聖職者）の前で聖書に手を置いて宣誓式に臨む。多民族国家のアメリカであるが、テレビのミサなどの番組も多く、キリスト教に関連した引用は常套手段となっている。日本の政治家はこのような宗教的引用はあまり聞いたことがない。神道と仏教

図表19 大統領演説で特定された英語学習者が活用すべき役に立つ談話構造

5 Features or Techniques for Clear & Effective Speeches

1. Repetition

1-1. Word & Phrase Repetition

[] We will deal fairly **with everyone, with everyone.**

1-2. Pattern Repetition

[] It's time **to** put away the harsh rhetoric, **to** lower the temperature, ---

2. Topicalization

[] So, with purpose and result, we turn to ---

3. Contrast or Emphasis

3-1. A but B

[] Politicians prospered **but** the jobs left, and the factories closed.

3-2. no A but B:

[] I pledge to be a president who seeks **not** to divide, **but** to unify.

3-3. no longer

[] We will **no longer** accept politicians who are all talk and no action.

4. Asking Questions

[] Are we going to step up, all of us?

[] Will we meet our obligations and pass long a new and better world to our children?

5. Quotation

[] The Bible tells us that to everything there is a season -- a time to build, a time to reap, a time to sow. And a time to heal. This is the time to heal in America.”

が共存する独自の宗教観を持つ日本人であるが、基本的に多神教であり、大多数の人の心を掴むような唯一絶対的な聖典や思想がないためではないだろうか。その点、一神教のキリスト教国の政治家やスピーチライターが演説原稿を準備する際に参考文献の選択に苦労しないと言える。

図表20 大統領演説で特定された英語学習者が活用すべき役に立つフレーズ

Trump	Biden
<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> I thank you from the bottom of my heart <input type="checkbox"/> No dream is too big. No challenge is too great. <input type="checkbox"/> Nothing we want for our future is beyond our reach. <input type="checkbox"/> This is your day. This is your celebration. <input type="checkbox"/> For too many of ---, a different reality exists. <input type="checkbox"/> Their dreams are our dreams and their success will be our success. <input type="checkbox"/> We share one hear, one home, and one glorious destiny. <input type="checkbox"/> From this day forward, a new vision will govern our land. <input type="checkbox"/> I will fight for you with every breath in my body and I will never, ever let you down. <input type="checkbox"/> You must speak our minds openly, debate our disagreement honestly, but always pursue solidarity. <input type="checkbox"/> Do not let anyone tell you it cannot be done. <input type="checkbox"/> You will never be ignored again. <input type="checkbox"/> I'd like to take this moment to thank ---. <input type="checkbox"/> It is time for us to come together as one united people. <input type="checkbox"/> It's time to --- <input type="checkbox"/> Your voice, your hopes, and your dreams, will define ---. <input type="checkbox"/> Together, we will make --- --- again. <input type="checkbox"/> We're going to be doing a job that hopefully you will be so proud of ---.. <input type="checkbox"/> The Bible tells us that ---. 	<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> Your courage and goodness and love will forever guide us along the way. <input type="checkbox"/> I am humbled by the trust and confidence you have placed in me. <input type="checkbox"/> Today, we celebrate the triumph not of a candidate, nut of a cause. <input type="checkbox"/> With unity, we can do great things, important things. <input type="checkbox"/> Some days when you need a hand, there are other days when we are called to lend a hand. <input type="checkbox"/> I'd like to ask you to join me in a moment of silent prayer. <input type="checkbox"/> May this be the story that guides us, the story that inspired us, and the story that tells ages yet to come that we answered the call of history. <input type="checkbox"/> I thank --- for their presence here today. <input type="checkbox"/> You deserve a special thanks from ---. <input type="checkbox"/> It is honor of my lifetime that ---. <input type="checkbox"/> I would not be here without ---. <input type="checkbox"/> I would not be here without the love and tireless support of ---. <input type="checkbox"/> I believe in the possibility of ---. <input type="checkbox"/> The Bible tells us that ---. <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>“Ask not what your country can do for you, ask what you can do for your country.” by J.F.K. (1961)</p> </div>

5-3. メディア英語を活用した自律英語学習習慣の形成

5-3-1. 受験後の英語学習のモチベーション

大学受験という非常に強力な外発的動機付けで英語を学んできた大学生のみならず、英検やTOEICやTOEFLなどの資格取得の義務のない社会人の英語学習者にとって、彼らの興味とやる気が持続される学習素材は、ネット（WWW, YouTube, SNS等）、テレビ、ラジオ（Podcastを含む）、新聞と雑誌（紙媒体、電子媒体）の5大メディアのニュースリソースである。

最新のニュースに触れることは、英語学習ではなく、母語を使用した日常生活において、既に広く普及した行いであり、習慣である。ゆえに、英語学習の時間を確保したり、その目的の設定においても普段の情報収集の手段として、英語のニュースに接する行為は、形式的には母語から目的言語へのコードスイッチングで日々進められるものである。しかし、外国のニュースが瞬時に日本語に翻訳され、伝えられる時代において、特定の言語のまま翻訳されないが学術的文献や高度に専門的な文献を除けば、日々伝えられる日常生活に関連した情報の収集を英語でする必要性は低いことになる。また、何よりも一般の英語学習にとっては目標言語のニュースリソースを原語のまま理解することは、例え文字媒体で目に触れても、難解な語句や言い回しの理解に注意を払うことになり、情報収集のコスパが著しく落ちることになる。そして、多くの場合、ニュースのスク립トやネット記事、英字新聞・雑誌の記事を見た場合に、多くの不明語句があることに気づく。

5-3-2. 英字新聞購読の恩恵

筆者は大学1年生の1984年5月から読売新聞を英訳したThe Japan News (旧The Daily Yomiuri) は、既に丸40年間自宅に届いたハードコピーを手にとって読んでいるが、未だに不明語句が毎日のように見つかる。一般の記事と異なり、コラム記事などは筆者の独特の言い回し、こだわりのある難解語や表現が、あたかも非母語話者には意地悪と思われるほどわざわざ使用されることが少なくない。外国語の語彙学習に終わりはないと考えたほうが良いかも知れない。ゆえに、情報収集の目的と英語学習をオーバーラップさせ、情報収集と同時に英語力を高めることは容易なことではないということである。

結論として、日本人英語学習者の最大の特徴は語彙力が著しく足りないことである。大学入学時に学生が有している英語の語彙力は正確には記述できないが数千ほどであり、これは母語話者の小学生の高学年の児童のレベルである。我々は小学生の頃新聞を読むと読めない言葉がよく見つかったことを記憶しているが、大学に入る頃になると新聞の第一面で理解不可能な言葉はほとんどなくなっているはずである。しかし、毎年4月の授業で国立大学(北大, 小樽商科大学) 1, 2年生に英字新聞の第一面全部を見てもらい不明語句を特定して

もらうと平均して20から30ぐらいの単語が特定されるが、日本の新聞の第一面を読んでこのような数の不明語句が特定されるとは考えにくい。毎年、この不明語句の数を知り母語と学習言語の語彙力の差がこれほど大きいものであることに驚きを隠せない学生が少なくない。このような語彙力のハンデを負った日本人英語学習者が米国留学し英語の母語話者と競い合い学位を取得することがいかにたいへんなことであるか想像できるであろうか。同様に、日本の大学院で学び学位を取得する外国人留学生の苦勞を感じられるだろうか。母語の環境で取得するか、外国語の環境で取得するか、その学位取得の価値に雲泥の差があることを経験者ならわかるだろう。

5-3-3. 英文法軽視で見えてくるもの

日本では英語のリスニング、リーディング、スピーキング、ライティングの4技能が強調され、技能別授業やさまざま取り組みが行われてきた。近年、英文法の明示的な学習が影を潜め、系統だった学習の重要性が軽視されてきているように思われる。その結果、大学の統一試験や派遣留学生の選考に使われることが多いペーパーベースのTOEFL ITPのスコア分布において、20年以上前は文法問題のスコアが最も高く、リスニングが最も低い平均点であったのが、近年はまったく逆になっている。現在の大学生は、高校の授業や日常生活の中で英語の音声に触れる機会や大学入試の新テストで英語のリスニングの得点が筆記試験と同じ比率になったこともあり、万全な対策をしてきている大学生がいることは喜ばしいことではあるが、文法の構造の明示的説明ができない学生が増えてきていると感じられる。4技能の教育の流れの中で文法はいわば影の存在であり、技能習得のバックボーンではあるが、基本文型から分詞構文や仮定法に至るまで英文法は大学入学前に学習済みという前提で大学の授業の大半は進められる。文法用語などはあまり大学の英語の教室では聞かれず、英語を使った授業が奨励されている風潮の中、その傾向はさらに進む。「現在完了進行形=present perfect progressive」や「仮定法過去完了=subjunctive mood past perfect」などは英語で言われても即座に理解できる学生がどれほどいるだろうか。

5-3-4. 語彙力軽視の日本の英語教育

同様に、大学の英語授業において語彙の大切さがどれほど強調されているだろうか。文法と同様に高校で学習済みとみなされていないだろうか。英語圏に留学して、英語の母語話者と同じ机に座り、英語の授業に参加してどのくらいの理解ができて、どのレベルの議論が隣の学生とできるであろうか。母語での議論から相当レベルを下げた内容のやり取りになってしまうことは明白である。グーグル米国本社兼日本法人代表取締役を務めた村上憲郎（2009）氏は、自らの社員や関連会社のMBA取得者の語彙力の分析を独自の方法で行い、米国人も日本人もそれぞれの母語で平均7万語の語彙力を有していると結論づけている。これは大学受験を目指す高校生が使う英和辞典1冊丸ごと掲載語句（見出し7万～10万語）にほぼ相当する。日本の小学生は低学年から毎日ドリルのように必死に当用漢字を覚える。そうしなければ日本で生活するのに支障が起きることは疑いもない。実は、言語の4技能や文法力は、母語話者であれば日常生活に不自由しないレベル、すなわち、互いのコミュニケーションに支障のないレベルであれば、自然に獲得できるのである。特にリスニングとスピーキングは学校教育で始まる段階で既に教育言語として学習者が必要なレベルに達していることを前提に進められる。そして、読み書きについて授業で明示的な教育が施される。そして、ある程度の母語のレベルになるとそれも不要となり、あとは適切な話し方や語彙力を増やしていく段階へと移行する。そして、母語話者同士の言語力の比較において、もはや聞き取る力や会話力などは、洗練されたレベルを求める場面は別として、一般的に必死になって努力し体得しようとする動機は存在しない。書くことも特定の書式に基づいた文面などは職場で覚える。ゆえに、最大のポイントは個人間の語彙力の違いになるのである。読書家は一般の会話ではあまり使わない用語を無意識に使うことがある。あきらかに読書習慣のない人は耳から聞いた言葉のインプットがほとんどであり、活字を通して語彙を増やす機会は限定的となる。

英語学習の場合、同世代の英語話者のレベルに達するために、4技能の習得を目指すことになるが、語彙力を高める努力も進めなければ母語話者のレベル

や十分ビジネス交渉を進められるレベルに高める時間が残っていないことになる。ビジネスマンは相手方の同業者と英語を共通語として取引をするには、仕事上の対象となる事象に対して共通の認識を持っており、すべて0から言い表し伝えようとしなくてもその前段階で、ある程度の共通認識が形成されており、それを言語で補完し交渉が成立するので母語話者レベルの英語力を求められることは少ない。なんとか通じ合えるのである。そして、英語の発信時、特に即興での会話では通常は自分の発信語彙内で言葉を発するのでだいたいのは言い表せる。聞き取りにおいても、対面の場合は、聞き取れなかったり言い直してもらったり、わかりやすく説明し直すようお願いすることも可能である。また、英単語がわからない場合は、コミュニケーションストラテジーを使用して、その場しのぎであるが何とか何の何を言い伝えようとしているかがわかってもらえる。aquarium（水族館）が言えなかったら、a place where you can see a lot of fish in tanksのような英英辞書に出ているような定義のように記述すれば相手には理解される。しかし、実はこれがビジネスパーソンの英語習得上のわなとなる。なんとか通じる術を得ることで、積極的語彙力を高めるモチベーションが湧かない。英語で書かれた社内文書などを日常的に触れる機会のある職場を除いて多くの国際的に活躍するビジネスパーソンの仕事のフレームワークを超えた語彙学習をする気にはならないのではないだろうか。しかし、日々英語のニュースや記事に触れると容赦なく、得体の知れない音声や文字に晒される。妥協なき英語のインプットに晒されるのである。

5-3-5. 持続可能な自律的英語学習コミュニティの創造

英語学習者、特に受験の洗礼を終えた大学生や現役や退職したビジネスパーソンは毎日英語のニュースのインプットをたくさんすることが大切である。それには、インターネットのNHK, BBC, CNNなどのサイトに毎日アクセスして、音声付き記事を中心に読み聞きし、さらにディクテーションを行い、感想を英語で書いてみるなどの自律的英語学習習慣を獲得することが急務である。これを辛抱強く続け、できれば同じ志を持つ仲間でライングループを形成し、互い

に励まし合うコミュニティが形成されることが理想である。筆者は、自身の授業を履修中の学生や修了者やゼミ生を中心に数十名のニュースディクテーションの勉強会を始めてから5年ほど経つが、18歳から80歳近くの熱心な方々が参加しており、土日祝日、盆や元旦も休むことなく365日、毎日早朝自身がライングループにアップする数秒程度の英語ニュースの一節のディクテーションと冠詞選択のタスク、さらに日々の生活を英文で書き綴るジャーナル（日報）をこなしている。このような学習集団が増えることで、英語学習が単に必修科目としての英語の単位修得や英検1級の取得で終わることなく、まだまだやりつづければならないという意識を日々英語ニュースに接して感じ取り、内発的動機付けに基づく持続可能な自律的学習をすることが大切であることに疑いの余地がなくなるのである。単独でコツコツ学習するだけでなく、英語学習を共に継続できる仲間や留学生・外国人が身近にいる状況であるSAELC: Sustainable Autonomous English Learning Community（持続可能な自律的英語学習コミュニティ）を創造し、自分自身の学習モチベーションを維持管理できるプロ英語学習者を養成することが英語教育の究極の目的でなければならない。

REFERENCES

- Anggoro, A. (2022). Syntactical analysis on sentence structures spoken by Joe Biden and Donald Trump in the election night speeches. *Journal of English Education and Teaching*, 6(2), 188-206.
- Golshan, T. (2016). Donald Trump's strange speaking style, as explained by linguists Is Donald Trump a throwback to ancient oratory — or an undisciplined rambler? Retrieved March 27, 2024, from <https://www.vox.com/2016/8/18/12423688/donald-trump-speech-style-explained-by-linguists>
- Halliday, M. A. K. (1994). *An Introduction to Functional Grammar* (2nd, ed.). London: Arnold.
- Jespersen, O. (1964). *Essentials for English Grammar*. Alabama: The University of Alabama Press.
- Kobayashi, T. (2014). The benefits of the CEG typology framework for learners, teacher, researchers, and textbook writers. *ATEM Journal*, 19, 3-15.
- Kurkhamidah, N., R.Hahira and A. Ningtyas (2021). Rhetorical analysis of Joe Biden's inauguration address. *Journal of Linguistics, Literature and Language Teaching*, 7(2), 73-82
- McCarthy, M. & Carter, R. (2001). Ten criteria for a spoken grammar. In E. Hinkel & Fotos. (Eds.), *New Perspectives on Grammar Teaching in Second Language Classroom* (pp.51-75). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Rong, J. (2021). An analysis on stylistic features of Donald Trump's Speech. *International Journal of English Linguistics*, 11(3), 11-18.
- Sandstrom, A. (2021). Biden is only the second Catholic president, but nearly all have been Christians Retrieved March 28, 2024, from <https://www.pewresearch.org/short-reads/2021/01/20/biden-only-second-catholic-president-but-nearly-all-have-been-christians-2/>
- Tiyas, S. (2023). The Analysis of Metaphorical Expressions in Joe Biden's Inauguration Speech. *Journal of Islamic Media Studies*, 3(1), 32-47.
- Zhou, K. (2024). *Quantifying the Uniqueness of Donald Trump in Presidential Discourse* Department of Computer Science, The University of Chicago.

